

「アーク」として生きる 今までの経験とアフリカンユースミートアップ My experiences and 'African Youth Meetup'

三浦 アーク

Miura Ark

複雑さや困難が自分の財産になった

私はウガンダ人の父と日本人の母の間に生まれました。東京で生まれ、4歳から小学6年生まではインド系のインターナショナルスクールで学び、その後、小学6年生の半ばから千葉県の叔母の家に移り、中学校卒業まで公立学校に通いました。高校1年生の今は、東京に戻り都立の高校に通っています。そして、アフリカ日本協議会のもとで「アフリカンユースミートアップ (African Youth Meetup)」を始め、運営メンバーとして活動しています。

幼少期はシンプルに思えても、今振り返ると複雑なものでした。その理由は二つあげられます。一つ目は、日本でバイレイシャルとして育っていくなかで、「周りとは違う自分」について幼いなりに意識していたからです。顔立ちや髪の毛、特に自分の肌が周囲と違うことで、街中や近所を歩いていると人から見られることが多かったです。また、アフロヘアも、「男っぽい」や「チリチリ」などと人から言われて、それらの出来事は自分自身を強く否定することにつながっていきました。

二つ目は、異なる二つの環境があったからです。4歳からインターナショナルスクールへ通い始めて、ここではすべて英語だったので、小さいころから英語と日本語を話せました。インド人が生徒の過半数を占め、他にもネパール人やロシア人、もちろん日本人生徒もいました。様々な背景を持つ生徒が集まる環境で勉強していたので、自然に「インターナショナル」な環境は居心地がよいと感じました。一方家に帰ると、家族とは日本語で話し、食事も和食の多い「日本人らしい」環境でした。「二つの世界」を同時に生きていた感じでした。それは複雑だけど、様々な価値観に触れプラスなことでもあったと思います。

そして小学6年生になると、事情はより複雑になっていきました。一人で千葉県の田舎にある公立学校へ転入し、母方の叔母の家族と暮らすようになりました。

た。まず、今までインターナショナルな環境で学校生活を送っていたのが、すべて日本語、日本のやり方で、周りが全員日本人という環境に移ったのが第一のチャレンジでした。日本でずっと暮らしていたので、基本的な日本の文化は身につけていたし、「日本的」な動作や倫理感覚にはあまり違和感を感じませんでした。周囲の「黒人、外国人」への偏見や接し方に対してとてもつらい思いをしました。例えば、最初のころは私を呼ぶときには「アーク」ではなく「黒人！黒人！」と呼んできたり、外見が笑いのものにされたりしました。また、今では自分の武器であると感じる「二つの言語を話せる」ことが、ねたみや悪口の的になったりもしました。

中学生になると、背が高いことと肌が黒いことから期待され、バスケットボール部に勧誘され入部しました。でも、スポーツは得意でなく、頑張っ、自分のコンプレックスも克服しようと無理をして厳しい練習をして、うつ病になるまで自分を追い込んでしまいました。また誰にとっても難しい思春期に突入する時期でもあるので、クラスのやんちゃな男子とゴシップ大好きな女子グループの両方からいじめを受ける日々が続き、自分について悩むことがとても多かったです。

その一方で、家に帰るとまた違う世界でした。日本人の叔母とその夫のフランス人の叔父、2人の間に生まれた従弟がいて、日本語、英語、フランス語が食事の時の会話でも自然に使われる環境でした。みんなが一番話せる共通語が英語だったので、英語がメインの会話をしましたが、それぞれが異なる文化背景と価値観を持っていたので、日々新たな気づきがありとても充実した家庭環境でした。幼いころから「多様性のある場所」を居心地がよいと感じてきた私には、叔父と叔母のところはとても重要な場所でした。

家族の影響で私は小さいころから絵を描くことや踊ること、歌ったり、ピアノを弾いたりすることが大好きでした。それはもちろん楽しいからではあるのです。

みうら あーく：2003年生まれ。高校1年生。ウガンダ人の父と日本人の母を持つ。ウガンダに2回渡航したことがある。2019年からAJFのもとでアフリカンルーツのユースが経験や思いを共有する、「アフリカンユースミートアップ (African Youth Meetup)」の活動をAJFで行っている。好きなことは、芸術活動(作詞・作曲、アートなど)。



が、やはり自分の「居場所」を感じたからだと思います。日本で生まれ育ち、国籍を持つのに、なかなか「日本人」として見てもらえないのが事実です。主に外見だけで「日本人」という定義から外された自分は、長い間にわたり「自分」というアイデンティティを探しました。その中で、「芸術」はルールというものがないし、自分のオリジナリティを限界なく表せるものなので、「自分」を出せる芸術活動をすることで居場所を認識することができたのです。

また、今となっては、幼少期に意識し始めた「自分自身に対する違和感」や中学で直面した困難な時期はすべて自分の財産で、人としての成長に欠かせなかったと思えます。自分の髪の毛や肌、つまり「アフリカ人のパーツ」に対して様々なことを言われるなかで、自分が持つ二つのルーツを再認識し、そのことに自信や誇りを持つきっかけになりました。そして黒人に対して偏見を持つ人は、どこから影響を受けているのか、なぜそのような考え方を持つのかとじっくり考えるようにもなりました

アフリカンユースミートアップへの思い

高校入学を機に東京に戻り、アフリカンルーツとしての誇りや悩みを分かち合える場所がほしいと思って、ユースの活動として、「アフリカンユースミートアップ」を始めました。アフリカにルーツを持つ中高生や若者を対象にしているコミュニティで、自分たちの思いや経験を共有しあう場です。テーマを決めて話し合ったり、ゲストを迎えたり、自由に交流したりするイベントを開催し、中学生から社会人までの運営メンバーがいます。

2020年1月には、第4回を「メディア×わたしたち」をテーマに開催し、メディアの社会への影響、自分に影響を与えた本や雑誌について話し合ったり、「自分の一番好きなおとこ」を紹介しあったりしました。

VOISSというオンラインメディアと協力し、アフリカにルーツを持つユースのストーリーを紹介していくこともしています。これからは、全国のユースとつながっていきたいです。



アフリカンユースミートアップに参加している中で、「自分が周囲と違うことでの壁」や様々なチャレンジがあった人は、私だけではなく、他にもたくさんいることがわかりました。歴史的背景や無知によって黒人に対する差別はユニバーサルであるし、特に日本では「多文化」や「自分と違う人」を認め合うハードルが高いと感じています。そういう中で、日本に住むアフリカンミックス（アフリカ系ハーフ）の人たちが、何かあっても一人だけで悩まず、「このコミュニティで支えあえる」と思えるような温かい場にしていきたいと思っています。異なるテーマや内容でイベントを行うことで、日本のアフリカンコミュニティの活性化にもつながればと思います。どうぞ、サポートをよろしくお願いします。

最近よく考えているのが、言語や文化的習慣がどれほど「自分自身」を決めているかということです。私は、英語と日本語（そして歳を重ねるごとにフランス語も）を用いてコミュニケーションをとったり、活動をしているので、よく言語がもたらすニュアンスやコミュニケーションスタイルの「壁」にあたっています。英語と日本語で同じような意味の言葉でも、微妙に「ニュアンス」が違うので本来自分が伝えたいことと別のことが伝わってしまったり、英語にある言葉が日本語にはなく説明に困ったりします。

あるいは、外国人と日本人と一緒に集まるときに、外国人は外国人同士で固まり、日本人は日本人同士で固まることが多いです。多文化が「二極化」するのではなく「一緒に接する」環境がよいと感じてきた私は、自分がどこにいればいいのか悩むことがよくあります。多文化が接し、理解しあうことで、どれほど人が前進していけるかを実感してきたので、この実態はとてももったいないことだと思います。私はまだ16歳なので、若いうちに世界各地に旅をして、様々な生き方や考え方を目で見て、この実態を変えられるように心を動かすアートや活動をしていけるように、がんばっていきます。

※ アフリカンユースミートアップ

<https://www.instagram.com/africanyouthmeetup/>

<http://www.facebook.com/africanyouthmeetup>